



## 「教務主任講座」の報告にかえて

— またまた過激になりました(^\_^) —

先日金沢で開催された「教務主任講座」の講師は、梶田叡一氏（環太平洋大学学長）でした。数年前の「教務主任講座」でも梶田氏が講演していました。その時の講演がわりと良かったので、うちの学校でも本を1冊買ってもらいました（08年度）。職員室に置いてありますが、読んだ人いるかなあ。

今回の講演ははっきりいって以前よりおもしろくありませんでした。それは私が彼の講演を聞くのが2回目だということもあるけど、とても90分の内容ではない。現行の学習指導要領批判まではいいけれど、どっかの新聞記者がどうか、文科省の役員と話したとか教組の代表者とも話したとか、ま、梶田氏は要するに「今は、みんな、右も左も私に関わってくるのですよ〜」「私が主流ですよ〜」と言いたいのです。

話している内容も、次に紹介する本に出ていることとあまり変わりませんでした。

そんなわけで、来年から実施される学習指導要領の理念について、08年度、梶田さんの本を読んだときに書いた私の感想を一部紹介して今回の「教務主任講座」の報告に変えます。ただ、私の元の文章はさすが過激なので、校内向けに少し直しておきます（それでも過激だけど…）

### 梶田叡一著『新しい学習指導要領の理念と課題』（図書文化、2008、176p、2100円）

著者は、兵庫教育大学学長。その前は、京都ノートルダム大学学長だった人です。

梶田叡一氏は今回の『学習指導要領』改訂の際、中央教育審議会の副会長として会議等に参加してきた人ですから、新しい学習指導要領については、その内部までよく知り尽くしており、「どういう目的で、どういうことが新しく提出されたのかが、よく分かるはずだ」と思って読んでみました。

本書には、いたるところに「ゆとり教育」や「新しい学力観」の反省がちりばめられています。「新しい学力観」や「ゆとり教育」は、その目的はどうであったにせよ、結果的には公立の教師の指導力を矮小化し、子どもを放り投げてしまったのだと梶田氏は言います。

例えばこんな文章が出てきます。

「新しい学力観」の名の下に、「関心・意欲・態度だけを重視すべきであって知識・理解・技能といった見える学力はどうでもいい」ということが言われたり、「子ども中心」という名目で「教え込みをしてはいけない」「指導を廃して支援に徹しよう」ということが言われたりしたわけです。こうしたことを当時の文部省の一部の教科調査官が言って歩き、それに付和雷同する教育学者がまた言って歩き、それをまた教育委員会の指導主事が学校現場に対してうるさくいい、「先進的な」学校や教師が各地でそうした実践を得々として発表する、ということがあったのです。（12p）

これだけ、モンブショウのやってきたことを批判する文章も珍しいです。これが中央教育審議会副会長の台詞なので、たいしたもの。

自分のことを振り返ってみると、「新しい学力観」「支援だ！」と言いだされた時にも、「教育の原点は、今までと変わらない」といって、自分の指導案には、かたくなに「指導上の留意点」と書いてきました（学校で決まった指導案の形式に従わなかったこともある）。

私はもともと＜支援＞なんてしているつもりはありません。ちゃんと「人類が築き上げてきた文化」を



<指導>しています。だって、教案のタイトルは、これまでも学習「指導」案でしょ。「支援」案ではないんです(もっとも、梶田氏によると「支援案」というふうに書いていたアホ【これも梶田氏の言葉】な先進校もあったとか)。…でも、いつの間にか、私も無理矢理「支援」と書かされてきたのです。今年の指導案はどうするのですか？ やっぱ<支援>ですか？

私の原点は教育実習にあります。その時、指導してくれた先生は(珠洲市での初めて女性校長になった方)、「指導案を書くときには、ここの右の欄に<指導上の留意点>と書くんだよ」と教えてくれました。教師になった私はそのことをかたくなに守り、そういう目で子どもたちを見てきました。指導するときの留意点というものと、自ら学ぼうとしている子どもたちへの支援というのでは、だいぶ差があります。授業というものは、自ら学ぼうとする子どもが課題を解決しようとしているのではなく、教師が与えた課題があってこそ学習が成り立っているのですから、どう考えても指導上の留意点なのです。

私にとっては(あるいは大部分の教師にとっては)「子どもへの学習指導が支援ですむなんてウソだということ」はずっと前から分かっていたことなのに、ここまで追い詰められないと気がつかないとは、文科省も情けないものです。お上が変わったからと「付和雷同」する教育学者や指導主事なんて、まったく<学問>をしてないんでしょうね。まさに上の言ったことの垂れ流し。自分の実践からの助言なんて何んにもナシなのでしょう。たぶん、今後は、その同じ人たちが「ちゃんと文化を教えるのですよ。子どもに指導するのですよ。」と言い廻るのかなあ。現行の指導要領の一部を<墨塗り>して…。

今更「アレハマチガイダッタ」なんて言われても…かわいそうなのは、教育政策に翻弄された子どもたちです。

新しい指導要領が、何を狙っているのかはここでは書きません(気になる人は指導要領を読めばいい)。

ただ、これまた何度も梶田氏の文章に出てくるのですが、「指導要領は最低基準だ」ということだけは確認しておきましょう。「最低基準」なのだから、もっともっと子どもたちの知的好奇心を刺激する、わくわくする授業をしてもいいのです。

梶田氏は、今後の授業の進め方について、教師が心がけたい3つのポイントとして、

- ①過去の実践を学び直すこと。
- ②子どもに考え続けることをがんばらせること。
- ③多くの知識を身につけさせること。

を挙げています。

最後に、国語教育の充実は「日本語で考える子どもたちが日本語をもっとしっかり知っておくべきであること」から来ることであり、大賛成です。だとすれば、早期の英語学習は必要なのか疑問になります。このあたりについては、梶田氏も「反対意見もあったが、とりあえず入れてみた」というような話で終わっています。

あと、雑誌『教育』でも指摘されていますが、本書には、新学習指導要領が持っている「道德教育の強化」や「愛国心指導の明確化」のような面についての言及はほとんどありません。これについては、あえて目をつぶっているのでしょうか？

今後の梶田氏の言動に注目したいと思います。

☆

今回の講演について少し触れましょう。

○英語教育については「もっと中学年からしっかり入れたかった。時間数も増やしたかった」と言っていました。今後はさらにそういう方向になるだろう…隣国に負けないために…みたいな感じでしたが…

○子どもたちにつけたい力とは「自分の人生を創る力(我)」と「社会に出る力(我々)」であると繰り返し述べていました。「われ」と「われわれ」を生き抜く力ですね。

○学校は勉強するところ、がんばって賢くなる場所。教師はその力をつけてあげられるプロになろう。教師の指導の下、貪欲に求め、知識や学び方を身につける。そのあとで、自ら考え、自ら学んだ。最初から「自ら考え、自ら学ぶ」なんてレベルが低いんです。

う〜ん、いいこと言うなあ。(次ページは、配布されたプリントです)